馬耳東風

「超ヤベェ」とか「半端ない」とか，老人には聞き慣れない言葉が増えてきた．若い人の言葉遣いが気になるのは，自分が歳をとった証拠であろう．今から何千年も前の楔形文字を解読したところ，「この頃の若者の言葉づかいが悪くて困る」とあったという話を最近ある本で読んだ．言葉は時とともに変化するものであり，その変化を嘆くのは老人の特権？　なのだろう．外来語の氾濫も老人にとってはやっかいである．古くから人口に膾炙し今や日本語と言ってもいい感のあるイデオロギーやストイックといった言葉は知らなければ常識を疑われかねないが，ポートフォーリオ，アジェンダ，モジュール，インセンティブなどと言われても，どうやって食べるんですか？　と突っ込みたくなってしまう．しかしこれらの言葉はそのまま使った方が意味が正しく伝わるからこそあえてカタカナ語として日本語化されたのだろう．

一方日本語化された外来語のなかには，本来の意味から少しずれている言葉も散見される．私が小学生の頃，アベック（avec）は男女の二人連れ，ランデヴー（rendez-vous）は男女の逢いびきの意味で使われていたが，フランス語のアベックは英語で言えばwithだし，ランデヴーは一般的な待ち合わせの意であり，男女の待ち合わせとは限らない．

われわれの領域では，SPF（specific pathogen free）養豚のSPFという言葉が本来の意味とは似て非なる言葉の例として，あげられるのではないだろうか．SPFは特定病原体不在と訳されている．特定病原体は，動物種あるいは動物の用途等によって定められるが，その特定病原体が“いない”という状態がfreeということである．手元の英和辞典には，「～free＝～から自由な，～何を免れた，～のないの意」という説明のあとに，「tax free免税の，lead free無鉛の」等が例示されている．“いない”というからには，“いる”という証拠があってはならず，したがって可能な限りの検査を実施して“いる”という事実のないことを証明しなければならない．実際，実験動物では，厳しいモニタリングが実施され，厳しい環境規制をしてSPF状態を維持している．

一方SPF養豚の場合はどうであろうか．残念ながら未だに「実験動物のSPFと畜産目的のSPFとは違う．養豚では不在というのは不可能だ」と言って憚らない人たちがいるのが実情である．確かに養豚場で，ある特定の病原体を不在にしてその状態を維持するのはきわめて困難である．かつて英国でMD（minimum disease）豚という言葉が使われたのも，SPFではないが病気はきわめて少ないということから命名されたものである．英語を母国語とする人にとって“free＝不在”なので，freeでないものをfreeとは言えない．そこでfreeではないが病気はほとんどないということでこのように言ったのである．その点，われわれにとって英語は外国語だから，freeという言葉が実感を伴って意識されにくい．不在でないのに不在と言っているという意識は起きにくいのであろう．しかし，不在でないのに不在ということは望ましいことではない．一方，長年にわたって積み上げてきた特定病原体不在を目指した飼育方法が優れていることは間違いなく，SPFという言葉にはこだわりたい．ジレンマである．どうすればいいのだろうか．ある人は，日本のSPFはspecific pathogen freeではなく，system for pig feedingの略だと言った．なるほどそう考えれば万事スッキリする．一考に値する意見だと考えるがいかがであろうか．

（久）